

I am a Cat – Chapter 10b (Natsume Sōseki)

「^{みょう じぞうさま}妙な地蔵様ね」

「それからが^{えんぜつ}演説よ」

「まだあるの？」

「ええ、それから^{や ぎ せんせい}八木先生がね、^{こんにち ごふじん かい}今日は御婦人の会でございますが、^{わたし}私がかような^{おはなし}御話をわざわざ^{いた}致したのは^{しょうしょうかんがえ}少々考があるので、^{もう しつれい し}こう申すと失礼かも知れませんが、^{ふじん}婦人というものは^{もの}とかく物を^{しょうめん}するのに正面から^{ちかみち とお ゆ}近道を通って行かないで、^{えんぼう}かえって遠方から^{まわ}廻りくどい手段^{しゅだん}をとる弊^{へい}がある。もつともこれは御婦人に^{かぎ}限った事^{こと}でない。明治の代は男子^{めいじ よ だんし}といえども、^{ぶんめい}文明の弊^{へい}を受けて^う多少^{たしょうじょせい}女性^{てすう}的^{ろうろく}になって^{つい}いるから、よく^{おお}いらざる^{おお}手数^{おお}と^{おお}労力^{おお}を^{おお}費^{おお}やして、これが^{ほんすじ}本筋^{しんし}である、^{ほうしん}紳士^{ごかい}のやるべき^{おお}方針^{おお}であると^{おお}誤解^{おお}している^{おお}もの^{おお}が多い^{おお}ようだが、これ等は^{ら かい かい}開化^{ごう}の業^{そくばく}に^{きけいじ}束縛^{べつ ろん}された^{およ}畸形^{およ}児^{およ}である。別に^あ論^あずるに^あ及^あばん。ただ御婦人^あに^あ在^あってはな^あるべく^あただいま^あ申^あした^あ昔^あ話^あを^あ御^あ記憶^あにな^あって、いざと^あ云^あう^あ場合^あには^あどうか^あ馬鹿^あ竹^あの^あよう^あな^あ正^あ直^あな^あ了^あ見^あで^あ物^あ事^あを^あ処理^あして^あいた^あだ^あき^あたい。あなた^あが^あ方^あが^あ馬鹿^あ竹^あにな^あれば^あ夫^あ婦^あの^あ間^あ、^あ嫁^あ 姑^あの^あ間^あに^あ起^ある^あ忌^あわ^あし^あき^あ葛^あ藤^あの^あ三^あ分^あ一^あは^あた^あし^あか^あに^あ減^あぜ^あら^あれる^あに^あ相^あ違^あない。人間^あは^あ魂^あ胆^あが^ああ^あれば^ああ^ある^あほ^あど、その^あ魂^あ胆^あが^あ崇^あって^あ不^あ幸^あの^あ源^あを^あな^あす^あので、多^あく^あの^あ婦^あ人^あが^あ平^あ均^あ男^あ子^あよ^あり^あ不^あ幸^あなのは、^あ全^あく^あこの^あ魂^あ胆^あが^ああ^あり^あ過^あぎ^ある^あから^あで^ああ^ある。ど^あう^あか^あ馬^あ鹿^あ竹^あにな^あって^あ下^あさい、と^あ云^あう^あ演^あ説^あなの」

「へえ、それで^{ゆきえ}雪江^きさんは^き馬鹿^き竹^きになる^き気^きなの」

「やだわ、^{かねだ とみこ}馬鹿^{かねだ}竹^{とみこ}だなんて。そんなもの^{しっけい}になりたく^{しっけい}はないわ。^{かねだ とみこ}金田^{かねだ}の^{とみこ}富子^{とみこ}さんなんぞは^{しっけい}失敬^{しっけい}だ^{しっけい}って^{しっけい}大^{しっけい}変^{しっけい}怒^{しっけい}ってよ」

「^{むこうよこちょう}金田^{むこうよこちょう}の^{むこうよこちょう}富子^{むこうよこちょう}さんて、あの^{むこうよこちょう}向^{むこうよこちょう}横^{むこうよこちょう}町^{むこうよこちょう}の？」

「ええ、あの^{むこうよこちょう}ハイカラ^{むこうよこちょう}さんよ」

「あの^{ひと ゆきえ}人も^{がっこう ゆ}雪江^{がっこう}さんの^ゆ学校^ゆへ行くの？」

「いいえ、ただ^{ふじんかい}婦人^{ぼうちょう}会^きだから^{ほんとう}傍^{ほんとう}聴^{ほんとう}に^{おど}来^{おど}たの。本^{おど}当^{おど}に^{おど}ハイカラ^{おど}ね。ど^{おど}う^{おど}も^{おど}驚^{おど}ろ^{おど}い^{おど}ち^{おど}ま^{おど}う^{おど}わ」

「でも大^{たい}変^{へん}い^い器^き量^{りょう}だ^だって云^いう^うじ^じゃあ^あり^りま^ませ^せん^んか」

「並^なみ^みで^です^すわ。御^ご自^じ慢^{まん}ほ^ほど^どじ^じゃあ^あり^りま^ませ^せん^んよ。あ^あん^んな^なに^に御^お化^け粧^{しょう}を^をす^すれ^れば^ばた^たい^いて^てい^いの^の人^{ひと}は^はよ^よく^く見^みえ^える^るわ」

「それ^{それ}じ^じゃ^あ雪^{ゆき}江^えさん^{さん}なん^{なん}ぞ^ぞは^はそ^その^のか^かた^たの^のよ^よう^うに^に御^お化^け粧^{しょう}を^をす^すれ^れば^ば金^{かね}田^ださん^{さん}の^の倍^{ばい}く^くら^らい^い美^{うつく}しく^くな^なる^るで^でし^しょう」

「あ^あら^らい^いや^やだ^だ。よ^よく^くっ^って^てよ^よ。知^しら^らな^ない^いわ^わ。だ^だけ^けど^ど、あ^あの^の方^{かた}は^は全^まく^くつ^つくり^り過^すぎ^ぎる^るの^のね^ね。なん^{なん}ぼ^ぼ御^お金^{かね}が^があ^あっ^った^たっ^って^て――」

「つ^つくり^り過^すぎ^ぎて^ても^も御^お金^{かね}の^のあ^ある^る方^{ほう}が^がい^いじ^じゃあ^あり^りま^ませ^せん^んか」

「それ^{それ}も^もそ^そう^うだ^だけ^けれ^れど^ども^も――あ^あの^の方^{かた}こ^こそ^そ、少^{すこ}し^し馬^ば鹿^か竹^{たけ}に^にな^なっ^った^た方^{ほう}が^がい^いで^でし^しょう。無^む暗^{やみ}に^に威^い張^ばる^るん^んで^です^すもの。こ^この^の間^{あいだ}も^もなん^{なん}と^とか^か云^いう^う詩^し人^{じん}が^が新^{しん}体^{たい}詩^し集^{しゅう}を^を捧^さげ^げた^たっ^って^て、み^みん^んな^なに^に吹^ふい^いち^ちょう^{ょう}して^{して}い^いる^るん^んで^です^すもの」

「東^{とう}風^{ふう}さん^{さん}で^でし^しょう」

「あ^あら^ら、あ^あの^の方^{かた}が^が捧^さげ^げた^たの^の、よ^よっ^っぼ^ぼど^ど物^{もの}数^ず奇^きね」

「でも^{でも}東^{とう}風^{ふう}さん^{さん}は^は大^まじ^じめ^めなん^{なん}で^です^すよ。自^じ分^{ぶん}じ^じゃ^あ、あ^あん^んな^な事^{こと}を^をす^する^るの^のが^が当^あた^たり^りま^まえ^えだ^だと^とま^まで^で思^{おも}っ^って^てる^るん^んで^です^すもの」

「そ^そん^んな^な人^{ひと}が^があ^ある^るか^から^ら、い^いけ^けな^ない^いん^んで^です^すよ。――そ^それ^れか^から^らま^まだ^だ面^{おも}しろ^ろい^い事^{こと}が^があ^ある^るの^の。此^この^の間^{あいだ}だ^だれ^れか^か、あ^あの^の方^{かた}の^の所^{ところ}へ^へ艶^{えん}書^{しょ}を^を送^{おく}っ^った^たもの^{もの}が^があ^ある^るん^んだ^だっ^って」

「お^おや^や、い^いや^やら^らしい^い。誰^{だれ}な^なの^の、そ^そん^んな^な事^{こと}を^をし^した^たの^のは」

「誰^{だれ}だ^だか^かわ^わか^から^らな^ない^いん^んだ^だっ^って」

「名^なま^{まえ}は^はな^ない^いの^の？」

「名^なま^{まえ}は^はち^ちゃ^ゃん^んと^と書^かい^いて^てあ^ある^るん^んだ^だけ^けれ^れど^ども^も聞^きい^いた^た事^{こと}も^もな^ない^い人^{ひと}だ^だっ^って^て、そ^そう^うし^して^てそ^それ^れが^が長^{なが}い^い長^{なが}い^い一^いっ^っけ^{けん}ん^んも^もあ^ある^る手^て紙^{がみ}で^でね。い^いろ^ろい^いろ^ろな^な妙^{みょう}な^な事^{こと}が^がか^かい^いて^てあ^ある^るん^んで^です^すと^とき^き。私^{わたし}が^があ^あな^なた^たを^を恋^{おも}い^いる^る」

っているのは、ちょうど^{しゅうきょうか} 宗 教 家^{かみ}が神にあこがれているようなものなの、あなたのためならば
祭壇^{さいだん}に供える小羊^{そな}となつて屠られるのが無上^{むじょう}の名誉^{めいよ}であるの、心臓^{しんぞう}の形^{かた}ちが三角^{さんかく}で、三角
の中^{ちゅうしん}心にキューピッドの矢^やが立^たつて、吹き矢^{ふきや}なら大当^{おおあた}りであるの……」

「そりや真^ま面^ま目^めなの？」

「真^ま面^ま目^めなんですとさ。現^{げん}にわたしの御^{おともだち}友^{とも}達^{だち}のうちでその手紙^みを見^みたもの^{さん}が三人^{さんにん}あるんですもの」

「いやな人ね、そんなものを見せびらかして。あの方は寒^{かた}月^{かんげつ}さん^{およめ}の^ゆとこへ御^{およめ}嫁^ゆに行^ゆくつもりな
んだから、そんな事^{せけん}が世^し間^{こま}へ知^しれちや困^{こま}るでしょうにね」

「困^{だいとくい}るどころですか大^き得^あ意^いよ。こんだ寒^{かた}月^{かんげつ}さん^{およめ}が来^きたら、知^あらして上^あげたらいいでしょう。寒
月^{ごぞん}さんはまるで御^{ごぞん}存^{ぞん}じないんでしょ」

「どうですか、あの方は学^{がっこう}校^いへ行^{たま}つて球^みばかり磨^{みが}いていらっしゃるから、大^{おお}方^{かた}知^{おお}らないでし
ょう」

「寒^{ほんとう}月^{げつ}さんは本^{ほん}当^{とう}にあの方^{おもらい}を御^き貫^{おき}になる気^{おき}なんでしょうかね。御^{おき}気^{おき}の毒^{おき}だわね」

「なぜ？ 御^{おかね}金^{かね}があつて、いざつて時^{とき}に力^{ちから}になつて、いいじゃありませんか」

「叔^{おば}母^{はは}さんは、じきに金^{ひん}、金^{ひん}つて品^あがわるいのね。金^あより愛^{あい}の方^{だいじ}が大事^{だいじ}じゃありませんか。愛
がなければ夫^{ふう}婦^ふの関^{かん}係^{けい}は成^{せい}立^{りつ}しやしないわ」

「そう、それじゃ雪^{ゆきえ}江^えさんは、どんなところへ御^{およめ}嫁^ゆに行^ゆくの？」

「そんな事^{べつ}知^{なに}るもんですか、別^{べつ}に何^{なに}もないんですもの」

雪^{ゆきえ}江^えさんと叔^{おば}母^{はは}さんは結^{けつ}婚^{こん}事^じ件^{けん}につい^{なに}て何^{べん}か弁^{べん}論^{ろん}を^{たくま}遅^{わか}しくして^{わか}いると、さつきから、分^{わか}らな
いなりに謹^{きん}聴^{ちよう}して^こいるとん子^{とつぜん}が突^{とつ}然^{ぜん}口^{くち}を開^{ひら}いて「わたしも御^{およめ}嫁^ゆに行^ゆきたいな」と云^いいだし
た。この無^む鉄^{てつ}砲^{ぱう}な希^{せい}望^{しゆん}には、さすが青^き春^みの気^きに満^みちて、大^{おおい}に同^{どう}情^{じよう}を寄^よすべき雪^{ゆきえ}江^えさんもち
よつと毒^ど気^{つけ}を抜^ぬかれた体^{てい}であつたが、細^{さい}君^{くん}の方^{ほう}は比^ひ較^{かく}的^{てき}平^{へい}気^きに構^{かま}えて「どこへ行^ゆきたいの」
と笑^{わらい}ながら聞^きいて見^みた。

「わたしねえ、本当はね、招魂社へ御嫁に行きたいんだけど、水道橋を渡るのがいやだから、どうしようかと思ってるの」

細君と雪江さんはこの名答を得て、あまりの事に問い返す勇気もなく、どっと笑い崩れた時に、次女のすん子が姉さんに向かってかような相談を持ちかけた。

「御ねえ様も招魂社が好き？ わたしも大好き。いっしょに招魂社へ御嫁に行きましょう。ね？ いや？ いやなら好いわ。わたし一人で車へ乗ってさっさと行っちまうわ」

「坊ばも行くの」とついには坊ばさんまでが招魂社へ嫁に行く事になった。かように三人が顔を揃えて招魂社へ嫁に行けたら、主人もさぞ楽であろう。

ところへ車の音ががらがらと門前に留ったと思ったら、たちまち威勢のいい御帰りと云う声がした。主人は日本堤分署から戻ったと見える。車夫が差出す大きな風呂敷包を下女に受け取らして、主人は悠然と茶の間へ這入って来る。「やあ、来たね」と雪江さんに挨拶しながら、例の有名なる長火鉢の傍へ、ぽかりと手に携えた徳利様のものを抛り出した。徳利様と云うのは純然たる徳利では無論ない、と云って花活けとも思われぬ、ただ一種異様の陶器であるから、やむを得ずしばらくかように申したのである。

「妙な徳利ね、そんなものを警察から貰っていらしたの」と雪江さんが、倒れた奴を起しながら叔父さんに聞いて見る。叔父さんは、雪江さんの顔を見ながら、「どうだ、いい恰好だろう」と自慢する。

「いい恰好なの？ それが？ あんまりよかあないわ？ 油壺なんか何で持っていたの？」

「油壺なものか。そんな趣味のない事を云うから困る」

「じゃ、なあに？」

「花活さ」

「花活にしちゃ、口が小さい過ぎて、いやに胴が張ってるわ」

「そこが面白^{おもしろ}いんだ。御前^{おまえ}も無風流^{ぶふうりゅう}だな。まるで叔母^{おば}さんと扱^{えら}ぶところなした。困ったもの^{ひと}だな」と独^{ひと}りで油壺^とを取り上げて、障子^{しょうじ}の方^{ほう}へ向^むけて眺^{なが}めている。

「どうせ無風流^{ぶふうりゅう}ですわ。油壺^{あぶら}を警察^{けいさつ}から貰^{まね}ってくるような真似^{まね}は出来^{でき}ないわ。ねえ叔母^{おば}さん」叔母^{おば}さんはそれどころではない、風呂敷^{ふろしき}包^{づつみ}を解^といて皿^{さら}眼^{まなこ}になって、盗難^{とうなん}品^{ひん}を検^{しら}べている。「おや驚^{おど}ろいた。泥棒^{どろぼう}も進歩^{しんぽ}したのね。みんな、解^といて洗^{あら}い張^{はり}をしてあるわ。ねえちよいと、あなた」

「誰^{だれ}が警察^{けいさつ}から油壺^{あぶら}を貰^まってくるものか。待^まってるのが退屈^{たいくつ}だから、あすこいらを散歩^{さんぽ}して^ほうちに堀^ほり出^だして来^きたんだ。御前^{おまえ}なんぞには分^{わか}るまいがそれでも珍^{ちん}品^{びん}だよ」

「珍^{ちん}品^{びん}過ぎるわ。一^い体^{たい}叔父^{しよふ}さんはどこを散歩^{さんぽ}したの」

「どこって日本^{にほん}堤^{づつみ}界^{かい}限^{げん}さ。吉原^{よしわら}へも這^{はい}入^みって見^みた。なかなか盛^{さかん}な所^{ところ}だ。あの鉄^{てつ}の門^{もん}を観^みた事^{こと}があるかい。ないだろう」

「だれが見^みるもんですか。吉原^{よしわら}なんて賤^{せん}業^{ぎやう}婦^ふのいる所^{ところ}へ行^ゆく因縁^{いんねん}がありませんわ。叔父^{しよふ}さんは教師^{きやうし}の身^みで、よくまあ、あんな所^{ところ}へ行^ゆかれたものねえ。本^{ほん}当^{とう}に驚^{おど}ろいてしま^まうわ。ねえ叔母^{おば}さん、叔母^{おば}さん」

「ええ、そうね。どうも品^{しな}数^{かず}が足^たりないよう^{こと}だ事^{こと}。これ^もでみんな戻^{もど}ったんでしょうか」

「戻^{もど}らんのは山^{やま}の芋^{いも}ばかりさ。元^{がん}来^{らい}九^く時^じに出^{しゅ}頭^{つとう}しろと云^いいながら十^{じゅう}一^{いち}時^じまで待^またせる法^{ほう}があるものか、これ^にだから日本^{にほん}の警^{けい}察^{さつ}はいかん」

「日本^{にほん}の警^{けい}察^{さつ}がいけないって、吉原^{よしわら}を散^{さん}歩^ぽしちや^しなおいけないわ。そんな事^{こと}が知^しれると免^{めん}職^{しよく}にな^なってよ。ねえ叔母^{おば}さん」

「ええ、なるでしょう。あなた、私^{わたし}の帯^{おび}の片^{かた}側^{かわ}がないんです。何^{なん}だか足^ありないと思^{おも}ったら」

「帯^{おび}の片^{かた}側^{かわ}くらいあきらめるさ。こ^{さん}っちは三^{さん}時^じ間^{かん}も待^{たい}たされて、大^{たい}切^{せつ}の時^じ間^{かん}を半^{はん}日^{にち}潰^{つぶ}してしま^まった」と日本^{にほん}服^{ふく}に着^き代^かえて平^{へい}気^きに火^ひ鉢^{ばち}へもたれて油^{あぶら}壺^{つぼ}を眺^{なが}めている。細^{さい}君^{くん}も仕^{しか}方^たがないとあきら諦^{あきら}めて、戻^{もど}った品^{しな}をそのま^ま戸^と棚^{だな}へしま^こい込^ぎんで座^ざに帰^{かえ}る。

「叔母さん、この油壺が^{ちんぴん}珍品ですとさ。きたないじゃありませんか」

「それを吉原で^か買っていたの？ まあ」

「何が^{なに}まあだ。分り^{わか}もしない癖^{くせ}に」

「それでもそんな壺なら吉原へ^い行かなくっても、どこにだつてあるじゃありませんか」

「ところがないんだよ。滅多^{めった}に有^ある品ではないんだよ」

「叔父さんは^{おじ}随分^{ずいぶん}石地蔵^{いしじぞう}ね」

「また小供^{こども}の癖^{なまいき}に生意気^{ごころ}を云う。どうもこの頃^{じょがくせい}の女学生^{くち}は口^わが悪^{わる}くつていかん。ちと女^{おんな}大学^{だいがく}でも読^よむがいい」

「叔父さんは^{ほけん}保険^{きらい}が嫌^{きら}いでしょう。女学生と保険とどっちが嫌なの？」

「保険は嫌ではない。あれは^{ひつよう}必要^{みらい}なものだ。未来^{かんがえ}の考^{かんが}のあるものは、誰^{だれ}でも這入^{はい}る。女学生は無用^{むよう}の長物^{ちょうぶつ}だ」

「無用^{むよう}の長物^{ちょうぶつ}でもいい事よ。保険へ這入^{はい}ってもいい癖^{くせ}に」

「来月^{らいげつ}から這入るつもりだ」

「きっと？」

「きっとだとも」

「およしなさいよ、保険なんか。それよりかその懸金^{かけきん}で何か^{なに}買^かった方が^{ほう}いいわ。ねえ、叔母さん」叔母さんはにやにや^{わら}笑^{わら}っている。主人^{しゅじん}は真面目^{まじめ}になって

「お前^{まえ}などは百^{ひゃく}も二百^{にひゃく}も生^いきる気^きだから、そんな呑気^{のんき}な事^いを云^いうのだが、もう少し^{すこ}理性^{りせい}が發達^{はったつ}して見^みろ、保険^{ほけん}の必要^{ひつよう}を感^{かん}ずるに至^{いた}るのは当^{あたり}前^{まえ}だ。ぜひ来月^{らいげつ}から這入^{はい}るんだ」

「そう、それじゃ仕方しかたがない。だけどこないだのように蝙蝠傘こうもりを買って下さる御金おかねがあるなら、保険に這入る方がまししかも知れないわ。ひとがいりません、いりませんと云うのを無理むりに買って下さるんですもの」

「そんなにいらなかったのか？」

「ええ、蝙蝠傘ほなんか欲ほしくないわ」

「そんなら還かえすがいい。ちょうどん子こが欲ほしがってるから、あれをこっちへ廻まわしてやろう。今日きょう持もって来きたか」

「あら、そりゃ、あんまりだわ。だって苛ひどいじゃありませんか、せつかく買って下すっておきながら、還かえせなんて」

「いらないと云うから、還かえせと云うのさ。ちっとも苛ひどくはない」

「いらない事はいらないんですけれども、苛ひどいわ」

「分わからん事ことを言いう奴やつだな。いらないと云うから還かえせと云うのに苛ひどい事ことがあるものか」

「だって」

「だって、どうしたんだ」

「だって苛ひどいわ」

「愚ぐだな、同おなじ事ことばかり繰くり返かえしている」

「叔父おじさんだって同おなじ事ことばかり繰くり返かえしているじゃありませんか」

「御前おまえが繰くり返かえすから仕方しかたがないさ。現げんにいらないと云ったじゃないか」

「そりゃ云いいましたわ。いらない事はいらないんですけれども、還かえすのは厭いやですもの」

「驚おどろいたな。没分曉わからずやで強情ごうじょうなんだから仕方しかたがない。御前がっこうの学ろんりがく校おしじゃ論理学を教おしえないのか」

「よくなってよ、どうせ無教育なんですから、何とでもおっしゃい。人のものを還せだなんて、他人だってそんな不人情な事は云やしない。ちっと馬鹿竹の真似でもなさい」

「何の真似をしる？」

「ちと正直に淡泊になさいと云うんです」

「お前は愚物の癖にやに強情だよ。それだから落第するんだ」

「落第したって叔父さんに学資は出して貰やしないわ」

雪江さんは言ここに至って感に堪えざるものごとく、潸然として一掬の涙を紫の袴の上^{うへ}に落^おした。主人は茫乎^{しゆじん}として、その涙^{なみ}がいかなる心理作用^{しんりさよう}に起因^{きん}するかを研究^{けんきゆう}するものごとく、袴^{はかま}の上^{うへ}と、俯^{うむ}つ向^むいた雪江^{せいか}さんの顔^{かお}を見^みつめていた。ところへ御三^{おさん}が台所^{だいどころ}から赤^{あか}い手を敷居^{しきいごし}越^こして揃^{そろ}えて「お客^{きゃく}さまがいらっしゃいました」と云^いう。「誰^{だれ}が来^きたんだ」と主人^{しゆじん}が聞^きくと「学校^{がっこう}の生徒^{せいと}さんでございませう」と御三^{おさん}は雪江^{せいか}さんの泣^{なき}顔^{がお}を横目^{よこめ}に睨^{にら}めながら答^{こた}えた。主人^{しゆじん}は客間^{きゃくま}へ出^でて行^ゆく。吾輩^{わがはい}も種^{たね}取^とり兼^{けん}人間^{にんげん}研究^{けんきゆう}のため、主人^{しゆじん}に尾^びして忍^{しの}びやかに椽^{えん}へ廻^{まわ}った。人間^{にんげん}を研究^{けんきゆう}するには何^{なに}か波瀾^{はらん}がある時^{とき}を扼^{えら}ばないと一向^{いっこう}結果^{けっか}が出^でて来^こない。平生^{へいぜい}は大方^{おおかた}の人^{ひと}が大方^{おおかた}の人^{ひと}であるから、見^みても聞^きいても張^{はり}合^{あい}のないくらい平凡^{へいぼん}である。しかしいざとなるとこの平凡^{へいぼん}が急^{きゆう}に靈^{れい}妙^{みょう}なる神秘^{しんぴ}的作用^{てききゆう}のためにむくむくと持ち上^もがって奇^きなもの、変^{へん}なもの、妙^{みょう}なもの、異^いなもの、一^{ひと}と口^{くち}に云^いえば吾輩^{わがはい}猫^{ねこ}共^{ども}から見^みてすこぶる後学^{こうがく}になるような事件^{じけん}が至^{いた}るところに横風^{おうふう}にあらわれてくる。雪江^{せいか}さんの紅^{こう}涙^{なみ}のごときはまさしくその現象^{げんしょう}の一つである。かくのごとく不可思議^{ふかしぎ}、不可測^{ふかそく}の心^{こころ}を有^{ゆう}している雪江^{せいか}さんも、細君^{さいくん}とはなし話^{はなし}をしているうちはさほどとも思^{おも}わなかったが、主人^{しゆじん}が帰^{かえ}ってきて油壺^{あぶらつぼ}を抛^{ほう}り出^だすやいなや、たちまち死^{しりゅう}竜^{りゅう}に蒸^{じょう}汽^き唧^{せき}筒^{とう}を注^{そそ}ぎかけたるごとく、勃^{ぼつぜん}然^{ぜん}としてその深^{しん}奥^{おう}にして窺^き知^ちすべからざる、巧^{こう}妙^{みょう}なる、美^び妙^{みょう}なる、奇^き妙^{みょう}なる、靈^{れい}妙^{みょう}なる、麗^{れい}質^{しつ}を、惜^{おしげ}気^げもなく発^{はつ}揚^{よう}し了^{おわ}つた。しかしてその麗^{れい}質^{しつ}は天下^{てんか}の女^{にょ}性^{せい}に共^{きょう}通^{つう}なる麗^{れい}質^{しつ}である。ただ惜^おしい事^{こと}には容^{よう}易^いにあらわれて来^こない。否^{いや}あらわれる事^には二^に六^{ろく}時^じ中^{ちゆう}間^{かん}断^{だん}なくあらわれているが、かくのごとく顕^{けん}著^{ちやく}に灼^{しゃく}然^{ぜん}炳^{へい}乎^ことして遠^{えん}慮^{りよ}なくはあらわれて来^こない。幸^{さいわい}にして主人^{しゆじん}のように吾輩^{わがはい}の毛^けをややとすると逆^{さか}さに撫^なでたがる旋^{つむ}毛^{まが}曲^{まが}りの奇^き特^{とく}家^かがおったから、かか^{きょう}る狂^{げん}言^{げん}も拝^{はい}見^{けん}が出来^{でき}たのであろう。主人^{しゆじん}のあとさえついてあるけば、ど^いこへ行^ぶつても舞^{やく}台^{しゃ}の役^わ者^{れし}は吾^う知^ごらず動^{うご}くに相^{そう}違^いな

い。面白い男を旦那様に戴いて、短かい猫の命のうちにも、大分多くの経験が出来る。ありがたい事だ。今度のお客は何者であろう。

見ると年頃は十七八、雪江さんと追つつ、返つつの書生である。大きな頭を地の隙いて見えるほど刈り込んで団子っ鼻を顔の真中にかためて、座敷の隅の方に控えている。別にこれと云う特徴もないが頭蓋骨だけはすこぶる大きい。青坊主に刈ってさえ、ああ大きく見えるのだから、主人のように長く延ばしたら定めし人目を惹く事だろう。こんな顔にかぎって学問はあまり出来ない者だとは、かねてより主人の持説である。事實はそうかも知れないがちょっと見るとナポレオンのようですこぶる偉観である。着物は通例の書生のごとく、薩摩緋か、久留米がすりかまた伊予緋か分らないが、ともかくも緋と名づけられたる袴を袖短かに着こなして、下には襯衣も襦袢もないようだ。素袴や素足は意気なものだそうだが、この男のはなはだむさ苦しい感じを与える。ことに畳の上に泥棒のような親指を歴然と三つまで印しているのは全く素足の責任に相違ない。彼は四つ目の足跡の上へちゃんと坐つて、さも窮屈そうに畏しこまっている。一体かしこまるべきものがおとなしく控えるのは別段気にするにも及ばんが、毬栗頭のつんつるてんの乱暴者が恐縮しているところは何となく不調和なものだ。途中で先生に逢ってさえ礼をしないのを自慢にするくらいの連中が、たとい三十分でも人並に坐るのは苦しいに違ない。ところを生れ得て恭謙の君子、盛徳の長者であるかのごとく構えるのだから、当人の苦しいにかかわらず傍から見ると大分おかしいのである。教場もしくは運動場であんなに騒々しいものが、どうしてかやうに自己を箝束する力を具えているかと思うと、憐れにもあるが滑稽でもある。こうやって一人ずつ相対になると、いかに愚駭なる主人といえども生徒に対して幾分かのおもむきがあるように思われる。主人も定めし得意である。塵積って山をなすと云うから、微々たる一生徒も多勢が聚合すると侮るべからざる団体となって、排斥運動やストライキをしでかすかも知れない。これはちょうど臆病者が酒を飲んで大胆になるような現象であろう。衆を頼んで騒ぎ出すのは、人の気に酔っ払った結果、正気を取り落したるものと認めて差支えあるまい。それでなければかように恐れ入ると云わんよりむしろ悄然として、自ら襖に押し付けられているくらいな薩摩緋が、いかに老朽だと云って、苟めにも先生と名のつく主人を軽蔑しようがない。馬鹿に出来る訳がない。

主人は座布団を押しやりながら、「さあお敷き」と云ったが毬栗先生はかたくなのまま「へえ」と云って動かない。鼻の先に剥げかかった更紗の座布団が「御乗んなさい」とも何とも云わずに着席している後ろに、生きた大頭がつくねんと着席しているのは妙なものだ。布団は乗るための布団で見詰めるために細君が勧工場から仕入れて来たのではない。布団にして敷かれずんば、布団はまさしくその名誉を毀損せられたるもので、これを勧めたる主人もまた幾分か顔が立たない事になる。主人の顔を潰してまで、布団と睨めくらをしている毬栗君は決して布団その物が嫌なのではない。実を云うと、正式に坐った事は祖父さんの法事の時のほかは生れてから滅多にないので、先っきからすでにしびれが切れかかって少々足の先は困難を訴えているのである。それにもかかわらず敷かない。布団が手持無沙汰に控えているにもかかわらず敷かない。主人がさあお敷きと云うのに敷かない。厄介な毬栗坊主だ。このくらい遠慮するなら多人数集まった時もう少し遠慮すればいいのに、学校でもう少し遠慮すればいいのに、下宿屋でもう少し遠慮すればいいのに。すまじきところへ気兼ねをして、すべき時には謙遜しない、否大に狼藉を働らく。たちの悪るい毬栗坊主だ。

ところへ後ろの襖をすうと開けて、雪江さんが一碗の茶を恭しく坊主に供した。平生なら、そらサヴェジ・チーが出たと冷やかすのだが、主人一人に対してすら痛み入っている上へ、妙齢の女性が学校で覚え立ての小笠原流で、乙に気取った手つきをして茶碗を突きつけたのだから、坊主は大に苦悶の体に見える。雪江さんは襖をしめる時に後ろからにやにやと笑った。して見ると女は同年輩でもなかなかえらいものだ。坊主に比すれば遥かに度胸が据わっている。ことに先刻の無念にはらはらと流した一滴の紅涙のあとだから、このにやにやがさらに目立って見えた。

雪江さんの引き込んだあとは、双方無言のまま、しばらくの間は辛防していたが、これでは業をするようなものだ気がついた主人はようやく口を開いた。

「君は何とか云ったけな」

「古井……」

「古井？ 古井何とかだね。名は」

「古井武右衛門」

「古井武右衛門——なるほど、だいぶ長い名だな。今の名じゃない、昔の名だ。四年生だったね」

「いいえ」

「三年生か？」

「いいえ、二年生です」

「甲の組かね」

「乙です」

「乙なら、わたしの監督だね。そうか」と主人は感心している。実はこの大頭は入学の
当時から、主人の眼についているんだから、決して忘れるどころではない。のみならず、時々
は夢に見るくらい感銘した頭である。しかし呑気な主人はこの頭とこの古風な姓名とを
連結して、その連結したものをまた二年乙組に連結する事が出来なかったのである。だから
この夢に見るほど感心した頭が自分の監督組の生徒であると聞いて、思わずそうかと心の裏
で手を拍ったのである。しかしこの大きな頭の、古い名の、しかも自分の監督する生徒が何の
ために今頃やって来たのか頓と推諒出来ない。元来不人望な主人の事だから、学校の生徒
などは正月だろうが暮だろうがほとんど寄りついた事がない。寄りついたのは古井武右衛門
君をもって嚙矢とするくらいな珍客であるが、その来訪の主意がわからんには主人も大に
閉口しているらしい。こんな面白くない人の家へただ遊びにくる訳もなかろうし、また辞職
勧告ならもう少し昂然と構え込みそうだし、と云って武右衛門君などが一身上の用事相談
があるはずがないし、どっちから、どう考えても主人には分らない。武右衛門君の様子を見
るとあるいは本人自身にすら何で、ここまで参ったのか判然しないかも知れない。仕方がな
いから主人からとうとう表向に聞き出した。

「君遊びに来たのか」

「そうじゃないんです」

「それじゃ用事ようじかね」

「ええ」

「学校がっこうの事ことかい」

「ええ、少し御話おはなししようと思おもって……」

「うむ。どんな事かね。さあ話したまえ」と云うと武右衛門君下を向いたぎり何にも言わな
い。元来武右衛門君は中ちゅう学がくの二年生にしてはよく弁べんずる方で、頭あたまの大きい割わりに脳力のうりよくは
発達はったつしておらんが、喋舌しゃべる事においては乙組中鏘おつぐみちゅうそうそう々たるものである。現げんにせんだってコロ
ンバスの日本訳にほんやくを教おしえろと云って大おおに主人しゅじんを困こまらしたはまさにこの武右衛門君である。
その鏘々たる先生せんせいが、最前さいぜんから吃どもりの御姫様ごひめさまのようにもじもじしているのは、何か云いわくのあ
る事ことでなくてはならん。単たんに遠慮えんりょのみとはとうてい受け取うられない。主人しゅじんも少しょう々しょう不審ふしんに思
った。

「話はす事ことがあるなら、早はやく話はしたらいいじゃないか」

「少し話はしにくい事ことで……」

「話はしにくい？」と云いながら主人は武右衛門君の顔かおを見みたが、先方せんぽうは依然いぜんとして俯向うつむきにな
ってるから、何事なにごととも鑑定かんていが出来できない。やむを得えず、少ごし語勢ごせいを変かえて「いいさ。何でも話はす
がいい。ほかに誰だれも聞きいていやしない。わたしも他言たごんはしないから」と穏おだやかにつけ加くわえた。

「話はしてもいいでしょうか？」と武右衛門君はまだ迷まよっている。

「いいだろう」と主人は勝手かってな判断はんだんをする。

「では話はしますが」といいかけて、毬栗頭いがぐりあたまをむくりと持ち上もげて主人の方あをちよっとまぼし
そうに見めた。その眼めは三角さんかくである。主人は頬ほをふくらまして朝日あさひの煙けむりを吹ふき出だしながらちよ
っと横よこを向むいた。

「実じつはその……困こまった事ことになっちまって……」

「何が？」

「何がって、はなはだ困るもんですから、来たんです」

「だからさ、何が困るんだよ」

「そんな事ことをする考かんがえはなかつたんですけれども、浜田はまだが借かせ借いせと云うもんですから……」

「浜田と云うのは浜田へいすけ平助かい」

「ええ」

「浜田げしゅくりょうに下宿料でも借したのかい」

「何なにそんなものを借したんじゃないありません」

「じゃ何を借したんだい」

「名前なまえを借したんです」

「浜田きみが君の名前かを借りて何をしたんだい」

「艶書えんしょを送おくったんです」

「何を送った？」

「だから、名前よは廃とうかんやくして、投函役になると云ったんです」

「何なんだか要領ようりょうを得えんじゃないか。一体誰いったいだれが何をしたんだい」

「艶書を送ったんです」

「艶書を送った？ 誰に？」

「だから、話はなしにくいと云うんです」

「じゃ君が、どこかの女おんなに艶書を送ったのか」

「いいえ、僕ぼくじゃないんです」

「浜田が送ったのかい」

「浜田でもないんです」

「じゃ誰が送ったんだい」

「誰だか分らないんです」

「ちっとも要領を得ないな。では誰も送らんのかい」

「名前だけは僕の名なんです」

「名前だけは君の名だって、何の事だかちっとも分らんじゃないか。もっと条^{じょうり}理^たを立てて話すがいい。元^{がんらい}来^うその艶書^{とうにん}を受けた当人はだれか」

「金^{かねだ}田^{むこうよこちょう}って向横丁にいる女です」

「あの金田という実^{じつぎょうか}業家か」

「ええ」

「で、名前だけ借したとは何の事だい」

「あすこの娘^{むすめ}がハイカラで生意^{なまいき}気だから艶書^{えんしょ}を送^{おく}ったんです。——浜田^{はまだ}が名前^{なまえ}がなくちゃいけない^いって云^いいますから、君^{きみ}の名前^{なまえ}をかけ^かて云^いったら、僕^{ぼく}のじゃつまらない。古井^{ふるい}武右衛門^{ぶえもん}の方がいいって——それで、とうとう僕^{ぼく}の名^なを借^かしてしま^しったんです」

「で、君はあすこの娘^{むすめ}を知^しってるのか。交^{こうさい}際^{さい}でもあるのか」

「交^な際^{さい}も何^{なに}もありやしません。顔^{かお}なんか見^みた事^{こと}もありません」

「乱^{らんぼう}暴^{ぼう}だな。顔^{かお}も知らない人^{ひと}に艶書^{えんしょ}をやるなんて、まあどう云^いう了^{りょうけん}見^{けん}で、そんな事^{こと}をしたんだい」

「ただみんながあいつは生意^{いば}気で威^い張^ばってるて云^いうから、からかってや^やったんです」

「ますます乱^{らんぼう}暴^{ぼう}だな。じゃ君^{きみ}の名^なを公然^{こうぜん}とかいて送^{おく}ったんだな」

「ええ、文章は浜田が書いたんです。僕が名前を借して遠藤が夜あすこのうちまで行って投函して来たんです」

「じゃ三人で共同してやったんだね」

「ええ、ですけれども、あとから考えると、もしあらわれて退学にでもなると大変だと思つて、非常に心配して二三日は寝られないんで、何だか茫やりしてしまいました」

「そりやまた飛んでもない馬鹿をしたもんだ。それで文明中学二年生古井武右衛門とでもかいたのかい」

「いいえ、学校の名なんか書きやしません」

「学校の名を書かないだけまあよかった。これで学校の名が出て見るがいい。それこそ文明中学の名誉に関する」

「どうでしょう退校になるでしょうか」

「そうさな」

「先生、僕のおやじさんは大変やかましい人で、それにお母さんが継母ですから、もし退校にでもなろうもんなら、僕あ困っちゃいます。本当に退校になるでしょうか」

「だから滅多な真似をしないがいい」

「する気でもなかったんですが、ついやってしまったんです。退校にならないように出来ないでしょうか」と武右衛門君は泣き出しそんな声をしてしきりに哀願に及んでいる。襖の蔭では最前から細君と雪江さんがくすくす笑っている。主人は飽くまでももったいぶって「そうさな」を繰り返している。なかなか面白い。

吾輩が面白いというと、何がそんなに面白いと聞く人があるかも知れない。聞くのはもっともだ。人間にせよ、動物にせよ、己を知るのは生涯の大事である。己を知る事が出来さえすれば人間も人間として猫より尊敬を受けてよろしい。その時は吾輩もこんないたずらを書くのは気の毒だからすぐさまやめてしまうつもりである。しかし自分で自分の鼻の高さが分らない

と同じように、自己の何物かはなかなか見当がつき悪くいと見えて、平生から軽蔑している猫に向ってさえかような質問をかけるのであろう。人間は生意気なようでもやはり、どこか抜けている。万物の霊だなどどこへでも万物の霊を担いであるくかと思つくと、これしきの事実が理解出来ない。しかも恬として平然たるに至ってはちと一嘘を催したくなる。彼は万物の霊を背中へ担いで、おれの鼻はどこにあるか教えてくれ、教えてくれと騒ぎ立てている。それなら万物の霊を辞職するかと思つと、どう致して死んでも放しそうにしない。このくらい公然と矛盾をして平気でいられれば愛嬌になる。愛嬌になる代りには馬鹿をもって甘じなくてはならん。

吾輩がこの際武右衛門君と、主人と、細君及雪江嬢を面白がるのは、単に外部の事件が鉢合せをして、その鉢合せが波動を乙なところに伝えるからではない。実はその鉢合の反響が人間の心に個々別々の音色を起すからである。第一に主人はこの事件に対してむしろ冷淡である。武右衛門君のおやじさんがいかにやかましくつて、おっかさんがいかに君を継子あつかいにしようとも、あんまり驚ろかない。驚ろくはずがない。武右衛門君が退校になるのは、自分が免職になるのとは大に趣が違ふ。千人近くの生徒がみんな退校になったら、教師も衣食の途に窮するかも知れないが、古井武右衛門君一人の運命がどう変化しようかと、主人の朝夕にはほとんど関係がない。関係の薄いところには同情も自から薄い訳である。見ず知らずの人のために眉をひそめたり、鼻をかんだり、嘆息をするのは、決して自然の傾向ではない。人間がそんなに情深い、思いやりのある動物であるとははなはだ受け取りにくい。ただ世の中に生れて来た賦税として、時々交際のために涙を流して見たり、気の毒な顔を作つて見せたりするばかりである。云わばごまかし性表情で、実を云うと大分骨が折れる芸術である。このごまかしをうまくやるものを芸術的良心の強い人と云つて、これは世間から大変珍重される。だから人から珍重される人間ほど怪しいものはない。試して見ればすぐ分る。この点において主人はむしろ拙な部類に属すると云つてよろしい。拙だから珍重されない。珍重されないから、内部の冷淡を存外隠すところもなく発表している。彼が武右衛門君に対して「そうさな」を繰り返しているのでも這裏の消息はよく分る。諸君は冷淡だからと云つて、けつして主人のような善人を嫌つてはいけない。冷淡は人間の本来の性質であつて、その性質をかくそうと力めないのは正直な人である。もし諸君がかかる際に冷淡以上を望んだら、それこそ人間を買い被つたと云わなければならない。正直で

すら^{ふつてい} 底^よな世にそれ以上^{よき}を^{よき}予期^{よき}するのは、馬琴^{ばきん}の小^{しょうせつ}説^しから志乃^{しの}や小文吾^{こぶんご}が^ぬ抜^{むこ}けだして、向^{むこ}う
三軒^{さんげん} 両^{りょう} 隣^{どなり} へ八犬^{はっけん}伝^{でん}が^ひ引^こき越^{とき}した時^{とき}でなくては、あて^{むり}になら^{ちゅうもん}ない無^{むり}理^{ちゅうもん}な注^{むり}文^{ちゅうもん}である。

主人^{しゅじん}はまずこのくらいにして、次^{つぎ}には茶^{ちゃ}の間^まで笑^{わら}ってる女^{おんな}連^{れん}に取り^とかかるが、これは主人^{しゅじん}の
冷^{れい}淡^{いたん}を一^{いっ}歩^ぽ向^むへ跨^{また}いで、滑稽^{こっけい}の領^{りょう}分^{ぶん}に躍^{おど}り込^こんで嬉^{うれ}しがっている。この女^{おんな}連^{れん}には
武^ぶ右^{えもん}衛^{くん}門^{ずつう}君^やが頭^{えん}痛^{しよ}に病^{じけん}んでい^ぶる艶^ぶ書^だ事^{ふく}件^{いん}が、仏^お陀^もの福^{りゅう}音^うのごとくありがたく思^{おも}われる。理^り由^{ゆう}
は^しないた^{かい}だ^{ぼう}ありが^こたい。強^こいて解^こ剖^ますれば武^こ右^ま衛^こ門^ま君^こが困^こるの^こが^こありが^こたいのである。諸^{しよ}君^{くん}
女^{おんな}に向^{むか}って聞^きいて御^ご覧^{らん}、^{ひと}「あなた^{ひと}は人^{ひと}が困^こるの^こを面^{おも}白^{しろ}が^おって笑^{わら}いますか」と。聞^きかれた人^{ひと}は
この間^まを呈^{てい}出^{しゅつ}した者^{もの}を馬^ば鹿^かと云^いうだ^いらう、馬^ば鹿^かと云^いわな^いければ、わ^いざと^いこんな^い問^{もん}を^いかけて
淑^{しゆく}女^{じょ}の品^{ひん}性^{せい}を侮^お辱^{じやく}したと云^いうだ^いらう。侮^お辱^{じやく}したと思^しうのは事^じ実^{じつ}か^しも知^しれ^しないが、人^{ひと}の困^こるの^こ
を笑^{わら}うのも事^じ実^{じつ}である。で^わあると^わすれば、これ^わから私^{わたし}の品^{ひん}性^{せい}を侮^お辱^{じやく}するよ^こうな^こ事^じを自^じ分^{ぶん}で^こし
てお目^めに^{なん}かけ^{こと}ますから、何^{いっ}と^{ぼく}か^{どろ}云^ぼっ^{ぼう}ち^{ぼう}や^いや^いよと断^たわ^んるの^いと一^{いっ}般^{ぱん}である。僕^{ぼく}は泥^{どろ}棒^{ぼう}を^いする。
し^ふか^どし^どけ^ぬっ^ぬして不^ふ道^{どう}徳^{とく}と云^いって^かは^おなら^どらん。もし不^ふ道^{どう}徳^{とく}だ^ぬなど^かと云^いえ^おば^ど僕^{ぼく}の顔^{かお}へ泥^{どろ}を^ぬ塗^ぬったもの
である。僕^{ぼく}を侮^お辱^{じやく}したものである。と主^{しゅ}張^{ちやう}するよ^おうな^おもの^りだ。女^{おんな}は^りな^りか^りな^りか利^り口^{こう}だ、考^{かん}え
に筋^{すじ}道^{みち}が立^たっている。い^{にん}や^{げん}しくも人^う間^まに生^いれる以上^{いじょう}は踏^ふん^けだ^り、蹴^けたり、ど^いや^いされ^いたり^し
て、し^ふか^ども人^{にん}が振^ふり^とむ^とき^きもせぬ時^{とき}、平^{へい}気^きで^かい^くる^ご覚^{かく}悟^ごが必^{ひつ}用^{よう}であるのみならず、唾^{つば}を吐^はき^はけ^ら
れ、糞^{くそ}を^うた^えれ^おか^えけ^こられた上^こに、大^こきな^こ声^こで笑^{わら}われるの^こを快^こく思^こわ^こなく^こて^こは^こなら^こない。それ
で^ななく^なて^なは^なか^なよ^なうに利^り口^{こう}な女^なと名^なの^なつ^なく^なもの^なと交^{こう}際^{さい}は出^で来^きない。武^ぶ右^{えもん}衛^{くん}門^{ずつう}先^{せん}生^{せい}も^{せい}ち^{せい}よ^{せい}つ^{せい}と^{せい}した
はず^まみ^まから、と^おん^おだ^お間^ま違^{ちが}い^いをして大^おに^お恐^おれ^お入^いって^いは^いるよ^いうな^いもの^いの、か^いよ^いうに^い恐^おれ^お入^いって^いる
もの^いを^い蔭^{かげ}で^い笑^{わら}うの^いは失^{しつ}敬^{けい}だ^いと^いく^いら^いは^い思^しう^いか^いも^い知^しれ^しない^いが、それ^{とし}は^い年^{ねん}が^い行^ゆか^いない^い稚^ち氣^きと^いう^いもの
ので、人^{しつ}が^い失^{しつ}礼^{れい}を^いした^い時^おに^い怒^おる^いの^いを^い気^きが^い小^ちさい^いと先^{せん}方^{ぽう}では^い名^なづ^いける^いそ^いう^いだ^いから、そ^いう^い云^いわれ^い
る^いの^いが^いい^いや^いなら^いお^いとな^いしく^いする^いが^いよ^いろ^いしい。

さいご ぶえもんくん こころい しょうかい きみ しんぱい ごんげ いだい
最後に武右衛門君の心行きをちょっと紹介する。君は心配の権化である。かの偉大なる
ずのう 頭脳はナポレオンのそれが功名心をもって充滿せるがごとく、まさに心配をもってはちき
れんとしている。時々その団子っ鼻がぴくぴく動くのは心配が顔面神経に伝って、反射
ときどき だんご ばな うご がんめんしんけい つたわ はんしゃ
作用のごとく無意識に活動するのである。彼は大きな鉄砲丸を飲み下したごとく、腹の中に
きよう むいしき かつどう かれ おお てっぽうだま の くだ はら なか
いかんともすべからざる塊まりを抱いて、この両三日処置に窮している。その切なさの余
かた いだ りょうさんちしよち きゅう せつ あま
り、別に分別の出所もないから監督と名のつく先生のところへ出向いたら、どうか助けてく
べつ ぶんべつ でどころ かんとく な せんせい でむ たす
れるだろうと思^{おも}って、い^{ひと}や^{うち}な^あ人^まの家^さへ大^あきな^さ頭^さを^さ下^さげ^こに^こま^こかり^こ越^こした^このである。彼^{へい}は平^{ぜい}生^{せい}

がっこう しゅじん とうきゅうせい せんどう こま こと わす
学校で主人にからかったり、同級生を煽動して、主人を困らしたりした事はまるで忘れて
いる。いかにからかおうとも困らせようとも監督と名のつく以上は心配してくれるに相違ない
と信じているらしい。随分単純なものだ。監督は主人が好んでなった役ではない。校長の
命によってやむを得ずいただいている、云わば迷亭の叔父さんの山高帽子の種類である。た
だ名前である。ただ名前だけではどうする事も出来ない。名前がいざと云う場合に役に立つな
ら雪江さんは名前だけで見合が出来る訳だ。武右衛門君はただに我儘なるのみならず、他人は
己れに向って必ず親切でなくてはならんと云う、人間を買い被った仮定から出立してい
る。笑われるなどとはおもひよも寄らなかつたろう。武右衛門君は監督の家へ来て、きっと人間に
ついて、一の真理を發明したに相違ない。彼はこの真理のために将来ますます本当の人間
になるだろう。人の心配には冷淡になるだろう、人の困る時には大きな声で笑うだろう。かく
のごとくにして天下は未来の武右衛門君をもって充たされるであろう。金田君及び金田令夫人
をもって充たされるであろう。吾輩は切に武右衛門君のために瞬時も早く自覚して真人間に
なられん事を希望するのである。しからずんばいかに心配するとも、いかに後悔するとも、い
かに善に移るの心が切実なりとも、とうてい金田君のごとき成功は得られんのである。いな
社会は遠からずして君を人間の居住地以外に放逐するであろう。文明中学の退校どころ
ではない。

かんが おもしろ おも こうし げんかん しょうじ かげ
かように考へて面白いなと思つていると、格子ががらがらとあいて、玄関の障子の蔭から
かおはんぶん
顔が半分ぬうと出た。

せんせい
「先生」

しゅじん ぶえもんくん く かえ よ
主人は武右衛門君に「そうさな」を繰り返していたところへ、先生と玄関から呼ばれたので、
だれ ぜん み すじかい は だ かんげつ
誰だろうとそちを見ると半分ほど筋違に障子から食み出している顔はまさしく寒月君であ
る。「おい、御這入り」と云ったぎり坐っている。

おきゃく き かえ
「御客ですか」と寒月君はやはり顔半分で聞き返している。

かま おあ
「なに構わん、まあ御上がり」

じつ さそ き
「実はちょっと先生を誘いに来たんですがね」

「どこへ行くんだい。また赤坂かい。あの方面はもう御免だ。せんだつては無闇にあるかせられて、足が棒のようになった」

「今日は大丈夫です。久し振りに出ませんか」

「どこへ出るんだい。まあ御上がり」

「上野へ行って虎の鳴き声を聞こうと思うんです」

「つまらんじゃないか、それよりちょっと御上り」

寒月君はどうてい遠方では談判不調と思つたものか、靴を脱いでそのそ上がつて来た。例のごとく鼠色の、尻につぎの中つたずぼんを穿いているが、これは時代のため、もしくは尻の重いために破れたのではない、本人の弁解によると近頃自転車の稽古を始めて局部に比較的多くの摩擦を与えるからである。未来の細君をもつて矚目された本人へ文をつけた恋の仇とは夢にも知らず、「やあ」と云つて武右衛門君に軽く会釈をして椽側へ近い所へ座をしめた。

「虎の鳴き声を聞いたつて話らないじゃないか」

「ええ、今じゃいけません、これから方々散歩して夜十一時頃になつて、上野へ行くんです」

「へえ」

「すると公園内の老木は森々として物凄いでしょう」

「そうさな、昼間より少しは淋しいだろう」

「それで何でもなるべく樹の茂つた、昼でも人の通らない所を択つてあるいと、いつの間にか紅塵万丈の都会に住んでる気はなくなつて、山の中へ迷い込んだような心持ちになるに相違ないです」

「そんな心持ちになつてどうするんだい」

「そんな心持ちになって、しばらく ^{たたず} 佇んでるとたちまち ^{どうぶつえん} 動物園のうちに、虎が鳴くんです」

「そう ^{うま} 旨く鳴くかい」

「大丈夫鳴きます。あの鳴き声は昼でも ^{りかだいがく} 理科大学へ ^{きこ} 聞えるくらいなんですから、^{しんやげきせき} 深夜闐寂として、^{しぼう} 四望人なく、^{ききはだえ} 鬼気肌 ^{せま} に ^{ちみはな} 逼って、^つ 魑魅鼻 ^{さい} を衝く際に……」

「魑魅鼻を衝くとは何の事だい」

「そんな事を ^い 云うじゃありませんか、^{こわ} 怖い ^{とき} 時に」

「そうかな。あんまり聞かないようだが。それで」

「それで虎が上野の老杉の葉をことごとく ^{ふる} 振り落すような ^{いきおい} 勢で鳴くでしょう。物凄いでさあ」

「そりゃ物凄いだろう」

「どうです ^{ぼうけん} 冒険に出掛けますか。きっと ^{ゆかい} 愉快だろうと思うんです。どうしても虎の鳴き声は ^よ 夜なかに聞かなくっちゃ、聞いたとはいわれなだらうと思うんです」

「そうさな」と主人は ^{しゅじん} 武右衛門君の ^{ぶえもんくん} 哀願に ^{あいがん} 冷淡であるごとく、^{れいたん} 寒月君の ^{かんげつ} 探検にも ^{たんけん} 冷淡である。

この時まで ^{とき} 黙然として虎の ^{もくねん} 話を ^{とら} 羨 ^{はなし} まし ^{うらや} そうに ^き 聞いていた ^{ぶえもんくん} 武右衛門君は ^{しゅじん} 主人の「そうさな」で ^{ふたた} 再び ^{じぶん} 自分の ^み 身の上を ^{うえ} 思い出したと ^{おも} 見えて、「^だ 先生、^み 僕は ^{せんせい} 心配 ^{ぼく} なんです ^{しんばい} すが、^い どうしたら ^い いいでしょう」と ^き また ^{かえ} 聞き返す。寒月君は ^{かんげつ} 不審な ^{ふしん} 顔をしてこの ^{かお} 大きな ^{おお} 頭 ^{あたま} を ^{わがはい} 見た。吾輩は ^{おも} 思う ^{しさい} 仔細 ^{しっけい} あって ^{ちゃ} ちょっと ^ま 失敬 ^{まわ} して茶の間へ廻る。

茶の間では ^{さいくん} 細君 ^{わら} が ^{きょうやき} ぐ ^{やすぢやわん} すす ^{ばんちゃ} 笑い ^{なみなみ} ながら、京焼の ^つ 安茶碗 ^つ に ^つ 番茶 ^つ を ^つ 浪々 ^つ と ^つ 注いで、アンチモニ ^つ ーの ^つ 茶托 ^つ の ^つ 上 ^つ へ ^つ 載せて、

「^{ゆきえ} 雪江さん、^{はばか} 憚り ^だ さま、^き これ ^{くだ} を ^{くだ} 出して ^{くだ} 来て ^{くだ} 下さい」

「わたし、いやよ」

「どうして」と細君は少々驚ろいた体で笑いをはたと留める。

「どうしても」と雪江さんはやにすました顔を即席にこしらえて、傍にあった読売新聞の上のしかかるように眼を落した。細君はもう一応協商を始める。

「あら妙な人ね。寒月さんですよ。構やしないわ」

「でも、わたし、いやなんですもの」と読売新聞の上から眼を放さない。こんな時に一字も読めるものではないが、読んでいないなどとあばかれたらまた泣き出すだろう。

「ちっとも恥かしい事はないじゃありませんか」と今度は細君笑いながら、わざと茶碗を読売新聞の上へ押しやる。雪江さんは「あら人の悪い」と新聞を茶碗の下から、抜こうとする拍子に茶托に引きかかって、番茶は遠慮なく新聞の上から畳の目へ流れ込む。「それ御覧なさい」と細君が云うと、雪江さんは「あら大変だ」と台所へ馳け出して行った。雑巾でも持ってくる了見だろう。吾輩にはこの狂言がちょっと面白かった。

寒月君はそれとも知らず座敷で妙な事を話している。

「先生障子を張り易えましたね。誰が張ったんです」

「女が張ったんだ。よく張れているだろう」

「ええなかなかうまい。あの時々おいでになる御嬢さんが御張りになったんですか」

「うんあれも手伝ったのさ。このくらい障子が張れば嫁に行く資格はあると云って威張ってるぜ」

「へえ、なるほど」と云いながら寒月君障子を見つめている。

「こっちの方は平ですが、右の端は紙が余って波が出来ていますね」

「あすこが張りたてのところで、もっとも経験の乏しい時に出来上がったところさ」

「なるほど、少し御手際が落ちますね。あの表面は超絶的曲線であらわせないです」と、理学者だけにむずかしい事を云うと、主人は

「そうさね」と好い加減な挨拶をした。

この様子ではいつまで嘆願をしても、どうてい見込がないと思いついた武右衛門君は突然かの偉大なる頭蓋骨を畳の上に押しつけて、無言の裡に暗に訣別の意を表した。主人は「帰るかい」と云った。武右衛門君は悄然として薩摩下駄を引きずって門を出た。可愛想に。打ちやっけて置くと巖頭の吟でも書いて華巖滝から飛び込むかも知れない。元を糺せば金田令嬢のハイカラと生意気から起った事だ。もし武右衛門君が死んだら、幽霊になって令嬢を取り殺してやるがいい。あんなものが世界から一人や二人消えてなくなったって、男子はすこしも困らない。寒月君はもっと令嬢らしいのを貰うがいい。

「先生ありや生徒ですか」

「うん」

「大変大きな頭ですね。学問は出来ますか」

「頭の割には出来ないがね、時々妙な質問をするよ。こないだコロンバスを訳して下さいって大に弱った」

「全く頭が大き過ぎますからそんな余計な質問をするんでしょう。先生何とおっしゃいました」

「ええ？ なあに好い加減な事を云って訳してやった」

「それでも訳す事は訳したんですか、こりゃえらい」

「小供は何でも訳してやらないと信用せんからね」

「先生もなかなか政治家になりましたね。しかし今の様子では、何だか非常に元気がなくって、先生を困らせるようには見えないじゃありませんか」

「今日は少し弱ってるんだよ。馬鹿な奴だよ」

「どうしたんです。何だかちょっと見たばかりで非常に可哀想になりました。全体どうしたんです」

「なに愚な事さ。金田の娘に艶書を送ったんだ」

「え？ あの^{おおあたま}大頭がですか。近頃の^{ちかごろ}書生はなかなかえらいもんですね。どうも^{おど}驚ろいた」

「君も心配だろうが……」

「何ちつとも心配じゃありません。かえって面白いです。いくら、艶書が降り込んだって大丈夫です」

「そう君が^{あんしん}安心していれば^{かま}構わないが……」

「構わんですとも^{わたくし}私はいっこう構いません。しかしあの^{おおあたま}大頭が艶書をかいたと云うには、少し驚ろきますね」

「それがさ。^{じょうだん}冗談にしたんだよ。あの娘がハイカラで^{なまいき}生意気だから、からかってやろうって、三人が^{さんじん きょうどう}共同して……」

「三人が一本の手紙を^{かねだ れいじょう}金田の令嬢にやったんですか。ますます^{きだん}奇談ですね。一人前の^{いちにんまえ せいよう}西洋料理を三人で^く食うようなものじゃありませんか」

「ところが^{てわ}手分けがあるんだ。一人が^{ひとり ぶんしょう}文章をかく、一人が^{とうかん}投函する、一人が^{なまえ か}名前を借す。で今来たのが^{いまき}名前を借した^{やつ}奴なんだがね。これが^{いちばんぐ}一番愚だね。しかも^{かねだ}金田の^{むすめ}娘の^{かお}顔も^み見た^{こと}事がないって云うんだぜ。どうしてそんな^{むちゃ}無茶な^{でき}事が出来たものだろう」

「そりゃ、^{きんらい}近来の^{おおでき}大出来ですよ。^{けっさく}傑作ですね。どうもあの^{おおあたま}大頭が、^{おんな}女に^{ふみ}文をやるなんて面白じやありませんか」

「^と飛んだ^{まちがい}間違にならあね」

「なになつたつて構かまやしません、相手あいてが金田きんたですもの」

「だつて君きみが貰もらうかもしれなしい人ひとだぜ」

「貰うかもしれなしいから構かまわないんです。なあに、金田きんたなんか、構かまやしません」

「君は構かまわなくつても……」

「なに金田きんただつて構かまやしません、大だい丈じょう夫ぶです」

「それならそれでいいとして、当とう人にんがあとになつて、急きゅうに良りょう心しんに責せめられて、恐おそろしくなつたものだから、大おほに恐きょう縮しゆくして僕ぼくのうちへ相そう談だんに来たんだ」

「へえ、それであんなに悄しおおとしているんですか、気きのちいこのみ小こさいこ子みと見みえますね。先せん生せい何なんとか云うつておやんなすつたんでしょう」

「本ほん人にんは退たい校こうになるんでしょうかつて、それを一いっ番ぱん心しん配ぱいしているのさ」

「何なにで退たい校こうになるんです」

「そんなわ悪あくるい、不ふ道どう徳とくなことをしたから」

「何なに、不ふ道どう徳とくと云ううほどでもありませんやね。構かまやしません。金田きんたじゃ名めい誉ようにおもってきつつと吹ふいちょうう聴ちやうしていますよ」

「まさか」

「とにかく可かわいそう想そうですよ。そんなことをするのがわるいとしても、あんなに心しん配ぱいさせちゃ、若わかいおとこひとりころ男おとこを一人殺してしまいますよ。ありや頭あたまはおおお大だいきいが人相にんそうはそんなにわるくありません。鼻はななんかびくびくさせて可かわいいです」

「君きみも大だい分ぶん迷めい亭てい見みたように吞のん気きない事ことを云ううね」

「何なに、これが時じ代だい思し潮しやうです、先せん生せいはあまり昔むかし風ふうだから、何なんでもむずかしく解かい釈しゃくなさるんです」

「しかし愚^ぐじゃないか、知^しりもしないところへ、いたずらに艶^{えん}書^{しよ}を送^{おく}るなんて、まるで常^{じょう}識^{しき}をかいてるじゃないか」

「いたずらは、たいがい常^{じょう}識^{しき}をかいていまさあ。救^{すく}っておやんなさい。功^く徳^{とく}になりますよ。あの容^{よう}子^すじゃ華^け巖^{ごん}の滝^{たき}へ出^で掛^かけますよ」

「そうだな」

「そうなさい。もっとお^{おお}きな、もっと分^{ぶん}別^{べつ}のある大^{おお}僧^{そう}共^{ども}がそれどころじゃない、わるいいたずらをして知^しらん面^{かお}をしていますよ。あんな子^こを退^{たい}校^{こう}させるくらいなら、そんな奴^{やつ}らを片^{かた}っ端^{はし}から放^{ほう}逐^{ちく}でもしなくっちゃ不^ふ公^{こう}平^{へい}でさあ」

「それもそうだね」

「それでどうです上^う野^のへ虎^{とら}の鳴^なき声^{こゑ}をききに行く^ゆのは」

「虎^{とら}かい」

「ええ、聞^ききに行^いきましょう。実^{じつ}は二^に三^{さん}日^{にち}中^{ちゆう}にちよつと帰^き国^{こく}しなければならぬ事^{こと}が出来^{でき}ましたから、当^{とう}分^{ぶん}どこへも御^お伴^{ばん}は出来^{でき}ませんから、今^{きん}日は是^ぜ非^ひいっしょに散^{さん}歩^ぽをしようと思^{おも}って来^きたんです」

「そうか帰^{かえ}るのかい、用^{よう}事^じでもあるのかい」

「ええちよつと用^{よう}事^じが出来^{でき}たんです。——ともかくも出^でようじゃありませんか」

「そう。それじゃ出^でようか」

「さあ行^いきましょう。今^{けふ}日は私^{わたくし}が晩^{ばん}餐^{さん}を奢^{おご}りますから、——それから運^{うん}動^{どう}をして上^う野^のへ行^いくとちよつど好^い刻^{こく}限^{げん}です」としきりに促^{うな}がすものだから、主^{しゅ}人^{じん}もその気^きになって、いっしょに出^で掛^かけて行^いった。あとでは細^{さい}君^{くん}と雪^{ゆき}江^えさんが遠^{えん}慮^{りよ}のない声^{こゑ}でげらげらけらけらからからと笑^{わら}っていた。